

## 宮沢賢治の求めた幸い

—「よだかの星」と「虔十公園林」より—

新名主 健 一

(一九九七年十月一日 受理)

宮沢賢治(以下、賢治とのみ記す)という人物・その作品には汲めども尽きせぬ魅力があり、作家論・作品論のレベルでの研究は膨大なものがある。

生前、全く世に注目されなかった賢治であるが「文学作品の価値ないしは文学史上の地位というような問題は簡単には決められないが、その作家なり作品なりがどのように人々によって受け入れられたかによって決まるのではなからうか。」(注1)「宮沢賢治文学の意義」竹下数馬)という見方からすると、その人・作品には看過できないものがあることは確かである。

しかしながら、私は作品を読んで「ほんたうの幸い」・「本統の道」等の語にひっきりかき覚えてならない。そのひっきりかきとは、作品をどう読んでも、何度読んでも、それらの語を説明できる文脈上の意味をとらえる手がかりが少ないというものである。

賢治およびその作品研究については「彼と一般的文壇や思潮から、全く切り離し、専らその特異な性格や、非凡な実生活からのみ展開して行く」とする従来の賢治研究は、今一度反省すべき必要があるのではなからうか。」(注2)「賢治における童話創作の動機」古賀久子)とか、「『雨ニモマケズ』が喚起する『聖人君子』的イメージが、その作品の多くを覆つ

てしまうのである。」(注3)「イメージを楽しむ、自己の開放を目指す読み」深川明子)というような問題点が指摘されている。

でも、先ほどの私のひっきりかきに答える文献は管見ではあるが皆無である。そこで本論において明らかにしたいことを次に記したい。

賢治に関わる作家論・作品論は相互にフィードバックしあう研究が多く、その作品の読み取りにおいても、それこそ賢治の実生活を知っていった方が感動するという特徴がある。(注4)このことは逆に、賢治の意図は作品上にうまく表されているかという問題を提起する。

初期作品とされる「蜘蛛となめくぢと狸」「貝の火」「ツエねずみ」「クねずみ」等はあまりに意図が全面に出ていて、その寓意性の強調が目立ち、賢治研究の一環としての作品の有用性はいえども、作品単独としての文学性は、かなり低いものと言わざるを得ない。「童話集を通読しても、極めて法華経などを読んだ事を隠して、表面には現はさないように気を付けてゐられたと言うやうなところがある。」(注5)「法華経」高橋新吉)にしても初期作品の意図は露骨に作品から読みとれる。それで初期作品は考察から除外したい。

さて、作品と作者とのつながりの中で読むのではなくて、作品を、ただ、それに表された文章表現と読者との関わりの中で読むとすれば、作者の意図・思惑を越えた読みも当然存在する。そのような読みを賢治作品において認めるということは、かなり勇敢な決意が必要である。見方によっては無謀な読みとせられることを覚悟しなければならぬ。しかしながら、そのような読みと従来の作者と作品との関係による読みの意味するものを問うことが賢治の作品を研究する新しい視点として導入されるべきだろう。つまり、私は、作品単独での読み取りと、作家と作品とのフィードバックをした上での読み取りのギャップの意味するものを問いたいのである。

## 一

「よだかの星」(大正十年発表)は、弱肉強食の世界に失望し、太陽や星に救いを求めるが拒否され、地上に落ちる寸前に空に舞い上がり、夜だかの姿のまま星になったというあらすじの作品である。この作品を作者の伝記等を援用することなしに、作品のみで読んだとしよう。そして星になりえた夜だかはほんとうに幸せであるかという問いを設定してみよう。もちろん「人物の内面はそこでは推察する以外にはないのであって、決め手はないのだ」ということをわきまえ、それを前提とした上で、あえて、人物の内面を問う<sup>注7</sup>わけである。すると手がかりになるのは、最後の場面における「ただこゝろもちはやすらかに……略……たしかに少しわらって居りました。……略……青い美しい光になって」(略・傍点―筆者)の文章である。これを読む限り、以前の状況にくらべれば幸せには違いないが、現実の世から逃避して得たものであって、決してほんとうの幸せではあるまいとも解釈できる。また、傍点をつけた部分を単純に心象表現と取り、ほんとうの幸せを得たとも解釈できる。つまり、前提をつけるならば、幾様にも解釈できるのである。

次に「虔十公園林」(昭和二年発表)について見てみよう。作品は、一見、馬鹿と思われるいた虔十の育てた林が、虔十の死後二十年程たちかかってその林で遊んだことのある若い博士によつて公園林になったというあらすじのお話である。最後の部分に「全く全く、この公園林の杉の黒い立派な緑、さわやかな匂、夏のすずしい陰、月光色の芝生が、これから何千人の人たちに、本当のさいわいが何だかを教えるか数えられませんでした。」(傍点、筆者)という箇所がある。この「本当のさいわい」の中身を規定する手がかりは、文章表現として作品中にはない。ただ、読者が推測するとしたら、次のようなものと想定できよう。

- ① 自然の中にある、自然と共に居ることがさいわい。
- ② 自然と共に居ると、本当のさいわいは何であるのか、あれこれ思いをめぐらすことができる。

- ③ 自然の中、自然と共に居ると本当のさいわいは何であるのか思い至る。

擬人化されている緑・匂・陰・芝生が教えるさいわいとは読者に判断をゆだねているとさえ思えるのである。

要するに「よだかの星」「虔十公園林」において、その作品のコンテキストからとらえられる「さいわい」「幸せ」は、明確・具体的には示されてはいなく、作品を通して感じとつてほしいといった程度にしかうけとることはできないのである。意図が作品に露骨にでていた初期作品とは明らかに異なる賢治の創作態度がうかがえよう。<sup>注8</sup>

## 二

さて、「よだかの星」「虔十公園林」を賢治の伝記および他の作品からとらえたら、どうなるのであろうか。

「よだかの星」<sup>注9</sup>については、その基底に法華経の精神があると言い古されている。

大橋は「法華経では、この世も、死後の世界も修行の場である。法華経には無我の中で、釈迦や他の生物につくすことで、仏と一体化できるという教えがある」(「宮沢賢治 まことの愛」大橋富士子 九三頁 真世界社)としている。仏と一体化することによって永遠の命を手に入れられるのである。つまり、賢治は「よだか」を通じて仏との一体化を願っていたのであって、「よだかの星」は西田良子によると「『欣求浄土』『厭離穢土』の仏教思想から生まれた寓話」(「賢治童話の生と死」田口

昭典 五二頁 洋々社) ということになる。

星となった「よだか」については次のような見方がある。

1、醜い存在が美しい存在に変貌を遂げる話(「宮沢賢治『よだかの星』試論 伊藤眞一郎<sup>注10</sup>」)

2、新しいよだかの星の誕生(「国語教育と作品研究」 山下宏<sup>注11</sup>)

いずれも、少くとも星になったことに消極的意味を与えておらず、むしろ積極的に肯定しているものととれる。さらには、西田は「よだか」と賢治を重ねて、「孤独なよだかはただ一人で命のかぎり『まことの世界』を追い求め、遂に自力で『まことの光』を得たのである。何にも悪いことをしないのに、みんなにいやがられるよだかの姿は、法華経の信仰を肉親の父母にも理解してもらえなかった孤独な賢治の姿である、自力で『まことの世界』に生まれかわったよだかの行為は突如無断上京し、一途に法華経の信仰に励んだ賢治が常に心に抱いていた悲願だったのだらう。」(『「まっすぐに進む」考、西田良子<sup>注12</sup>」)としている。つまり、一般的にいわれる弱肉強食の世界に生きることのつらさから彼岸へ逃れることによって、争いからの脱却を目指すのである。西田は、賢治の「よだかの星」執筆について「この時期の賢治はいかにすれば世の中のあるそいを解決し、まことの世界を実現させることが出来るか、その方法を模索していた時期である。」(「賢治童話展開の基底にあるもの」 西田良子<sup>注13</sup>)としている。賢治にとって法華経の思想を、いかに作品として書き得るかという習作であったと言うことができよう。自らの理想・自らの生き方を直接反映させたものであり、作者と作品との密接な関係が把握できるといふ特色がある。

さて、次に「虔十公園林」を見てみよう。この作品の中における虔十は国木田独歩の「春の鳥」にでてくる六蔵とは少し異なる。一般的に虔十は「表面的には愚かな人間……略・筆者……純真であり、素直さ、仕

事熱心、やさしさ」(「虔十公園林」の授業 藤田治)・「デクノボーであり、精薄的である。」(「虔十とベコ石」 小沢俊郎<sup>注14</sup>)・「純粹、無垢、無邪氣……略・筆者……あるいは、無私、無償性といった性格(「虔十とベコ石」 小沢俊郎<sup>注15</sup>)」ととられている。共通していることは外見上の姿と内面のすばらしさの乖離である。外面から人を判断することの愚かさを寓意として取りたいところである。しかしながら、内に秘めたものの価値をあまりに高く評価しているきらいがあるのではないか。たとえば、次のような場面での虔十の内面の読みとりはどうであろうか。

おかあさんに杉苗を七百本買ってくれと頼んだとき、にいさんが「虔十あそこは杉苗えでも成長らない処だ」と言ったら、虔十がきまり悪そうにもじもじして下を向いてしまった場面。なぜ虔十はきまり悪そうにもじもじして下を向いたのであろうかということを考えると、家中の人たちが働いているところに突皮なことを言ってしまったという意識があると思える。つまり、にいさんのことばの意味を理解しているので、理解できる力があるということが読み取れる。さらに杉苗を植える穴を掘はじめた時、にいさんに「虔十、杉あ植えるとき堀らないばわがないんだじゃ」といわれ、きまり悪そうに鉢をおく場面。また、平二に「やい虔十、此処さ杉植えるなんてやっぱ馬鹿だな。第一おらの畑あ日影にならな」と言われた時、顔を赤くして何か言いたそうにしたが、言えないでもじもじした場面。いずれの場合も、虔十は相手の言うことがわかり、その上、そのことが理屈に合っているとの判断をしていると把握できる。以上のようなことから精薄的と取るよりも常人と異なる面があるという取り方が私には妥当なように思える。<sup>注16</sup>

この作品の主題については、虔十がその劣悪な条件下にフルに生きた尊<sup>注17</sup>さ・虔十自身の価値観の第三者による確認・純粹に燃焼していること<sup>注18</sup>の美しさ等<sup>注19</sup>があげられているが、私は、「虔十にしてみれば、いっさい

無意識の、無償の、せずにいられなかった無私の行為だった。その行為が後になって認められるという結末は、名もなく貧しく美しい魂の価値への賢治の信念である。<sup>注20</sup>というところから同感である。

外見からだけ人を判断する俗人の価値観への警鐘と、自然との共生の喜びを描いたものとも取れる。以上のようなことから、「本当のさいわい」は、先の作品の文脈上の読み取りに加えて、慶十公園林で遊ぶ人達が公園林の由来を知り、慶十のような人物の存在を、たとえ常人とは違っていても認めるところにあるとも取れるのである。つまり、賢治が「慶十公園林」において意図したものは、常人とは違う人物であっても世のためになることをするのだ、そして、そのことを人々は身をもって感じなければならぬということの二つがあげられるだろう。

### 三

賢治作品には「本当のさいわい」「まことの幸福」「ほんとうの幸福」「世界のまことの幸福」とか、「まことの道」「ほんとうの道」とかいふ語がよく出てくる。それぞれの語の使い分けに意味の異なりがあるかどうか文脈の上から検討してみたが、特に異なりは認められない。原子朗の指摘にもあるように、他にも同一のことを指すのに似たような表現をしている例はある。<sup>注20</sup>そこで、「本当のさいわい」を前述の種々の表現の前者を一括するものとして考えて、その意味するところを考えてみたい。すると、まず頭に浮かぶのは「農民芸術概論綱要」(大正十五年)である。「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という有名なことはキャッチフレーズ的なものであって、幸福の中心をとらえることは文脈上不可能である。ただ「正しく強く生きること」は銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである。」「(序論)」

(傍点 筆者)「風とゆきさし 雲からエネルギーをとれ」(「農民芸術の制作」)「銀河を包む透明な意志」(「結論」)からは、宇宙と自己の一体化・自然と自己の一体化が、目ざすべきもの、すなわち、「本当のさいわい」<sup>注21</sup>「幸福」であることが読み取れる。さらに「われらは世界のまことの幸福を索ねよう。求道すでに道である。」「(序論)」からは「まことの幸福」と「道」<sup>注22</sup>との関係が把握される。

「手紙」(全集 手紙四)は、「ポーセとチュンセがもしもポーセをほんとうにかあいさうにおもふなら大きな勇気を出してすべてのいきものほんたうの幸福をさがさなければならぬ。……略・筆者……なぜまっしぐらにそれに向って進まないか」とある。しかし「ほんたうの幸福」の中心を探す手がかりはない。そこで手がかりを「雨ニモマケズ」の詩に求めたい。そこには賢治の人としての理想像が描かれている。静かに笑いな<sup>注23</sup>がらくらす世界——立身出世主義にまつわる卑劣な情念や競争のない社会——がそうである。同様に他の作品からも賢治のきらったことをあげると、逆にそういうことのない世界を理想としていたということがいえる。

### 四

賢治作品の中にデクノボー・デクノボー精神が描かれていると思える作品は「気のいい火山弾」「よだかの星」「どんぐりと山猫」「なめとこ山の熊」「オッペルと象」「祭の晩」「慶十公園林」「グスコブドリの伝記」である。

デクノボー礼讃につながる原型と目される「気のいい火山弾」では、からかわれても相手にしないベコ石が社会的価値を持つに至ることが描かれている。「どんぐりと山猫」で一郎に教えられた山猫がどんぐりた

ちに言うことば「よろしいしづかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかめちやくちゃで、てんでなつてゐなくて、あたまのつぶれたやうなやつが、いちばんえらいのだ」(傍点・筆者)はデクノボー像を示している。どんぐりたちの主張する「えらい」の身は「頭がとがっている。丸い。大きい。背が高い、押しつこが強い」という外見的なものである。それに対して一郎が助言した基準は行動内容である。さらに「虔十公園林」における虔十は、まわりの者からは馬鹿とあざけられる。言われていることの意味は分かるが、常人と同様に表現できないだけである。その虔十が用材としてでなく、全く無意図的に行つた杉林の造林が、虔十の死後、公園林として社会的な価値を持つたものになる。死後に残るものをテーマにしたとも思え、その意味で「虔十公園林」のテーマの一つとして、デクノボー・本当のさいわいを加えたい。また、「グスコブドリ」の伝記<sup>25</sup>では自分を犠牲にして、現世でのあらゆる生き物の幸福を求めるのである。「まこと」の追求、捨身精神を描いてみせる。ブドリが「私はその大循環の風になるのです。あの青ぞらのごみになるのです。」と言っているが、ここにも法華経における捨身の後に仏と一体化して永遠の命を手にするという思想がみられる。さらに登場人物やその行動について見てみると、農民のために自分の体を犠牲にしてまで尽くし「世界全体の幸福」「ほんたうの幸ひ」をもとめる賢治自身を物語にしたのではなからうか。そう思えるほど、この作品のブドリと賢治は共通点が多いのである。

これらの作品は賢治がデクノボーの境地を絶えず探求していった結果であると言つてよい。外からはデクノボー・デクノボー的であることとあらわれても、きちんとした判断の目を持ち、他の生物のために尽すことは、「まこと」の追求の結果生まれた賢治の理想的行動と見ることができ

これら一群の作品を見渡すと、作品ごとにデクノボー・本当のさいわい・まことの道の描き様が、それぞれ異なっているのが把握される。さらに、それぞれの重みのおき方も違っていることに気づかされる。

「ひかりの素足」に「『今の心持を決して離れるな。おまえの国にはここから沢山の人たちが行つてゐる。よく探してほんたうの道を習へ。』その人は一郎の頭を撫でました。」とある。「ここ」から行っている「沢山の人たち」は、この世でデクノボーとされる人たちのことを指すのではなからうか。そのデクノボーたちこそが「本当のさいわい」を得るために「まことの道」を歩んでいる者として描かれている。

### おわりに

一において論述したように、賢治の作品は作品だけの読み取りの場合と、二におけるように作家と作品とのフィードバックを重ねてする読み取りには明らかに異同が認められる。また、三・四で論及した他の作品における「本当のさいわい」、「まことの道」や、デクノボーからのアプローチを二における読み取りに重ねてみると、賢治作品は「本当のさいわい」を求めるために「まことの道」を歩む者はこうありたいという賢治の願望を具現化したものであると考えられる。

作品と作者と読者の関係において、外山滋比古の指摘するように、読者は作者に直接会うものではない、作品と作者のギャップに<sup>26</sup>がっかりするから……ということは、賢治においては通用しないようである。というのは、賢治を賢治たらしめているのは、作品から作者に興味を抱いた読者が、その生涯の特異さと求道性に心ひかれ、さらに作品を読み直して見るという作業におちいらざるを得ないからである。しかしながら、一で指摘したように、その意図を読者に十分伝えられるような作品であ

るかについては、今なお私には若干の疑問の念が残っている。ただ、賢治の場合は作者と作品とのフィードバックの中で作品の読みが深まるという特色があることは確かである。

- 注1 「宮沢賢治文学の意義」竹下数馬・『宮澤賢治研究資料集成 第20巻』二頁一行～三行 所収 平成四年 日本図書センター)
- 注2 「賢治における童話創作の動機」古賀良子『宮澤賢治研究資料集成 第九巻』三〇四頁一行～三行 所収 平成二年 日本図書センター)
- 注3 「イメージを楽しむ、自己の開放を目指す読み」深川明子『こどもの側に立つ 国語科 授業創造』No.17 一三頁 平成八年九月号)
- 注4 「作品は、完成した瞬間に作者の手を離れると言うが、宮沢賢治の場合は、その実人生と作品とが不可分のものとされてきたのである」(牛山恵『こどもの側に立つ 国語科 授業創造』No.17 二九頁 平成八年九月号)という見方が一般的である。
- 注5 「法華経」高橋新吉『宮澤賢治研究資料集成 第一巻』一九五頁四行～五行 所収 平成二年)
- 注6 「賢治童話の基底にあるもの」西田良子『宮澤賢治研究資料集成 第十七巻』平成四年)の一三二頁以降の年代区分に従った。
- 注7 「西郷竹彦文芸教育著作集 17」三三九頁 明治図書 一九七五
- 注8 注5における高橋の言があたりはまる作品である。
- 注9 たとえば「賢治の文学、またその思想を組成するだろう背景条件の一つとして、仏教とりわけ法華経の世界観があることは、すでに多くの人の認めるところである。」(『国語教育と作品研究』六八頁 山下宏・笠間書院 昭和五三年)の如く。
- 注10 (26 宮沢賢治 童話の宇宙」一三頁 有精堂 一九九〇)
- 注11 「よだかの星の世界像」『国語教育と作品研究』山下宏・八五頁 笠間書院 昭和五三年)
- 注12 「『まっすぐに進む』考」西田良子『宮澤賢治研究資料集成 第十八巻』
- 注13 三三八頁 平成四年 日本図書センター)
- 注14 「賢治童話展開の基底にあるもの」西田良子『宮澤賢治研究資料集成 第十七巻』一三三頁 日本図書センター 平成四年)
- 注15 「(慶十公園林)の授業」藤田治『文芸の授業 中学校一・二年』明治図書 一七一頁 明治図書)
- 注16 「(慶十とベコ石)小沢俊郎」『宮澤賢治研究資料集成 第二〇巻』五九頁 日本図書センター 平成四年)
- 注17 このことについては、宮沢賢治作品研究 I「新名主健一『解釈』第二七巻 第二号」所収 二七頁～二九頁において詳述した。
- 注18 注15と同じ 五九頁
- 注19 注15と同じ 六四頁
- 注20 「イーハトヴ」「イーハトヴ」「イエハトヴ」「イーハトヴ」「イーハトヴ」と様々に賢治は呼びかえている。(『宮沢賢治の人と作品』原子朗 二六頁 『鑑賞日本現代文学 ⑬宮沢賢治』角川書店 昭和五六年)
- 注21 「グスコブドリの伝記」において主人公に「世界のまことの幸福」を求めさせている。
- 注22 「校本 宮澤賢治全集 第十一巻」三一九頁～三二二頁 筑摩書房 昭和49年
- 注23 「評伝 宮沢賢治」境忠一 桜楓社 二〇七頁・二〇八頁での境のとらえ方と ほぼ同じである。
- 注24 「その国の広い事、人民の富んである事、この国には生存競争など、申す様はつまらない競争もなく労働者対資本家などいふ様な頭の痛める問題もなく総てが楽しみ総てが悦び、総てが真であり善である国でありました。」(『旅人のはなしから』『アザリア 第一号』(校本 宮澤賢治全集第十四巻)八百頁 筑摩書房 昭和52年)というふうな理想的世界を描いている。
- 注25 田口昭典はこの点について「グスコブドリの自己を犠牲にして壮烈な死を遂げたのではなく、広大な仏のいのちのなかに還っていったのである」

注  
26

（「賢治の生と死」田口昭典 一八七頁 洋々社 平成三年）としている。  
作品と作者との関係を大別すると、外山の言うように作品のみで作品をと  
らえた方がいい場合と、作品と作者とのフィードバックによって作品の読  
み取りが深まる場合の二種が存在するように思われる。

補注  
1

「こゝに述べられたデクノボウ思想は、たとえ彼の内奥からの叫びであつ  
たとしても、この作品自体には、それを説明するだけの要素は見られない。  
もし彼が、これをもつてその表現に満足していたのであれば、それは、彼  
のひとりよがりと言う外はない」（「賢治童話の性格」大井健 『宮沢賢治  
研究資料集成 別巻』日本図書センター 平成二年）というように意図と  
表現のギャップはすでに指摘されている。